

清洲城下町遺跡

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南下する五条川の中流右岸に位置する。遺跡名の由来となった「清洲城」は、古くより織田信長の居城として知られており、その本丸推定地は、戦前から史跡公園化され、現在では、桜の名所となっている。

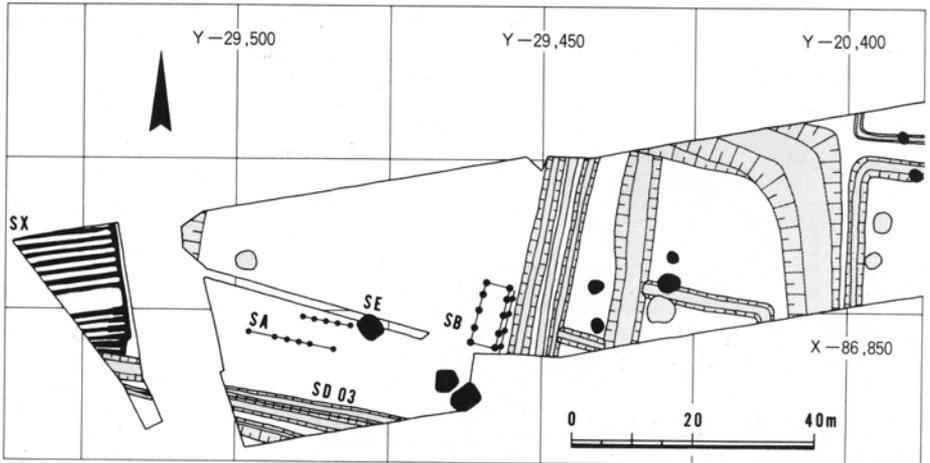
しかし、本丸部分だけでなく、「城下町」全体が遺跡地として認識されるのは近年になってからであり、発掘調査が実施されたのも、環状2号線関係がはじめてであった。

本年度の調査(7,474㎡)は、環状線用地内のうち五条川西(A～E区)と、国鉄東海道本線東(F区)の2地点について実施し、共に良好な遺構、遺物群を検出することができた。

発掘の結果、検出された遺構群は、概ね、Ⅰ～Ⅲ期の3区分が可能であったが、このうち、Ⅰ期(中世)、Ⅲ期(近世)の遺構が面的な広がりには欠けているのに対し、Ⅱ期、即ち、「清洲城下町期」は、遺構、遺物共に、極めて豊富な内容を有するものであった。



60年度調査区(A～F)位置図 1:5000



60F区 遺構配置図 1:1200

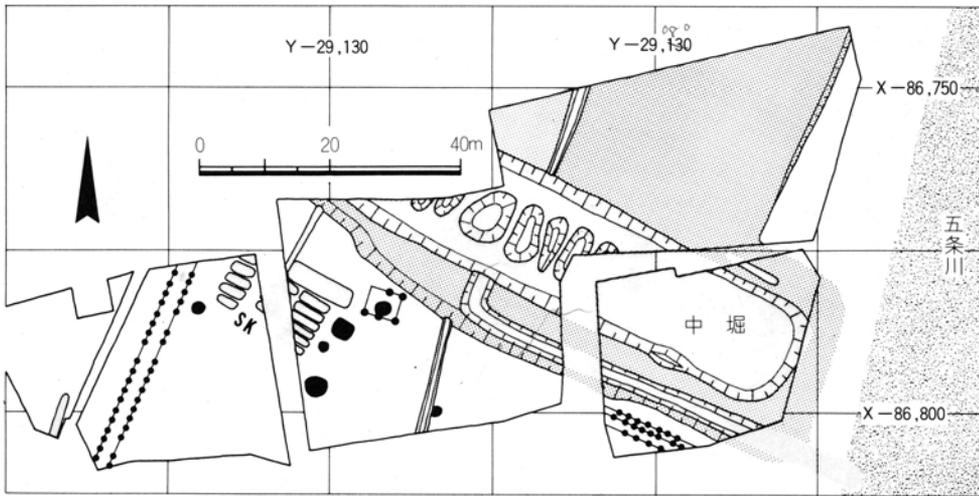
主な遺構

城下町遺跡は、五条川の自然堤とその後背湿地上にまたがって位置する。この為、調査区内でも、淡黄褐色シルトが基盤となる部分の他に、灰色砂が直接遺構検出面となる地点もあり、I期の遺構は、概ねこの部分を中心に分布している。

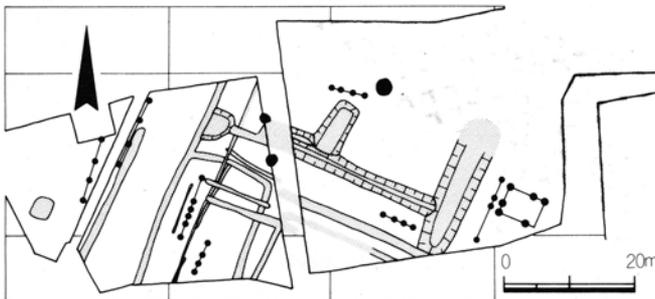
II期にはいと、遺構は、調査区全面に展開するが、その過程で、少なくとも2回以上の整地が行なわれた様である。この整地は、第1回目が、「地ならし」程度であったのに対し、2回目は、最大厚80cmにも達する「盛土」を伴うものである。従って、この整地層を確認し得た部分では、II期を層位的に前後2小期に区分することが可能であった。

II期の主な遺構は、一定の方向性を有する大小の溝群と柵列、耕作地跡と考えられる畝状の高まり、井戸等であったが、なかでも注目されるのは、五条川に直交する方向で検出されたII-2期の大溝(SD01)である。この溝は、蓬左文庫所蔵の「清洲村古城図」などにみられる清洲城を巡る三重の堀のうち、「中堀」に相当するものと考えられる。

III期の遺構は、旧美濃街道沿いの部分も含め、極めて希薄であった。「清洲越」以降は大半が耕地化されていた為と考えられる。



60A～E区 遺構配置図(II-2期)



60A～E区 遺構配置図(II-1期)

上層(II-2期)と下層(II-1期)の遺構を比較すると、前者が非常に規格性の強い堀と土壇群から構成されているのに対し、後者は中小の溝群、柵列等が中心であり、一定の方向性は認められるものの計画性はさほど強くない。

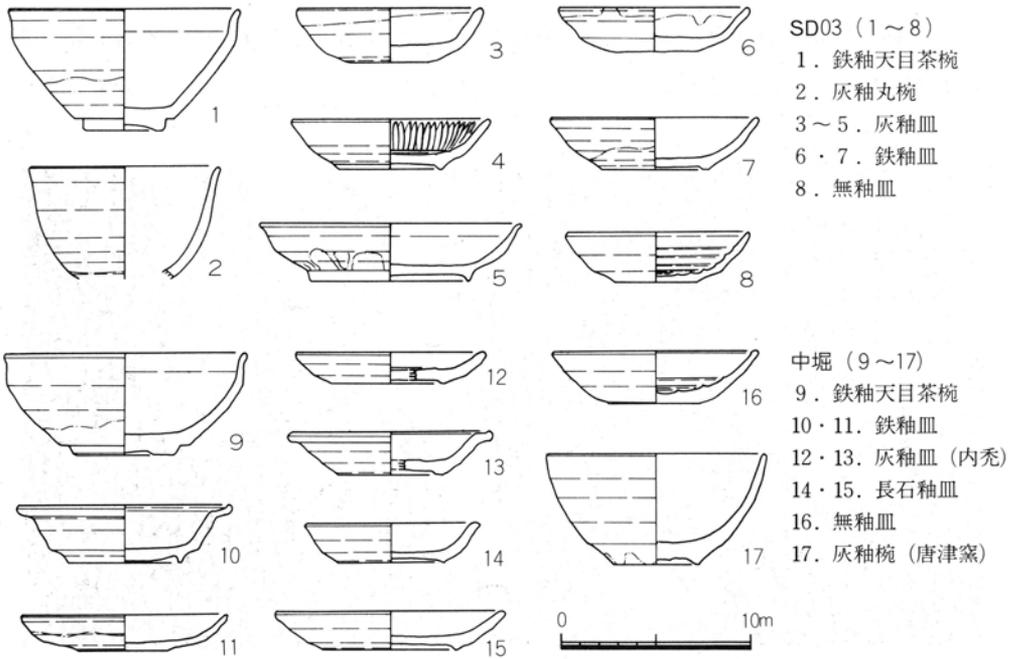
出土遺物

出土品は、土器類を中心に各期にわたっているが、一括性の高いものは、大半がⅡ期に属するものである。また木器類・金属器類もみられたが、量的には多くなかった。

〈Ⅱ-1期〉 溝(60F S D03)よりの一括出土品であり、組成的には、羽釜、内耳鍋、大小の皿等の土師質製品が全体の過半を占めている。

施釉陶器のうち、碗類では、鉄釉の天目茶碗が多いが、全て露胎部に化粧掛けを施すものである。丸碗は、灰釉、鉄釉共、量的には多くない。また、皿類では、緑釉のものが若干みられる他は、全面施釉のものが大半であり灰釉を施したものは、内面に印花文を有するものが多い。内禿となる皿も少数みられたが長石釉を施すものは確認し得なかった。

〈Ⅱ-2期〉 大溝(中堀)よりの出土品であり、大量の山茶碗片等を混入するが、Ⅲ期以降の攪乱は少ない。組成的には、皿類を含めた土師質の製品が極端に少ないが、これは、Ⅱ-2期の一般的な傾向とは考えられない。また内面に「天正十四」の紀年銘を有する丸瓦を含め、大量の瓦も出土している。施釉陶器のうち、碗類では、Ⅱ-1期同様、天目茶碗が多数を占めるが、化粧掛けのないものが多く、また少数ではあるが、鉄釉の平碗、丸碗もみられる。皿類では、鉄釉、灰釉にまじり、長石釉の丸皿、菊皿も相当数含まれる。また、黄瀬戸鉢、志野平鉢、鉄釉半筒茶碗、唐津窯碗、楽焼碗等、明らかに「茶陶」として製作されたものが多いのも、この一群の特徴といえる。



清洲城下町遺跡出土遺物 1:4

まとめ

1. 本年度の調査の結果、検出された遺構は、多種多様ではあったが、最大の成果は、深さ3m、幅18mを測り、「中堀」に比定される大溝を確認し得たことである。

この大溝は、構造的には、直接五条川とは接続せず、南（本丸）側に掘削された幅3m程の溝が、五条川との水路の役割を果たしていたものと考えられる。また、底部の土壌群は、いわゆる「障子堀」とは考えにくく、五条川の水量の増減とは独立して、堀内の水位を保つ為の湧水施設であったと推定したい。

2. 出土遺構と文献等による年代の対応関係は、明確にはし得ないものの、Ⅱ-2期遺構群の終末を慶長15年（1610）の「清洲越」に求めるのは、まず間違いないと考えられる。

また、Ⅱ-1期からⅡ-2期への移行は、織田信雄が清洲城の大改修をしたとされる天正14年（1586）前後が考えられ、中堀出土の紀年銘瓦も、その傍証とすることができる。

Ⅱ-1期の開始については、不明な点も多いが、文明10年（1478）の、尾張守護所の下津からの移転を一つの可能性として考えたい。

3. 出土遺物の年代観に関しては、Ⅱ-1期の遺構中より末期の宍窯製品と大窯製品が伴出しており、城下町への大窯製品の供給とⅡ期の開始は、相前後する時期と考えたい。

また、盛土層以前には、長石釉製品は存在せず、その流入はⅡ-2期以降と思われる。

登窯製品については、御深井釉を施すものは、Ⅲ期以前の遺構には存在せず、また、織部釉製品も、確実にⅡ期の遺構に伴うものは見出せなかった。

この他、京窯、唐津窯、信楽窯等の製品の搬入が確認されるのは、いずれも、Ⅱ-2期段階にはいつてからである。

（梅本博志）



A・C・D区 全景(Ⅱ-2期)